

茶道

仙台湾茶道石州流清水派 宗家十一世
大泉道鑑さん

取材・文・写真・イラスト・図解 菅原りほ



茶室に対し斜体に向き合い、お手前が正客からもっとも優遇に見えよう。立ち居振る舞いのあちうこうらに、男性的な「和」が配されている。



膝の横に拳をつく庄礼のかたち。武家の茶室たる雄々しさがみられる。



茶碗を回して景色を外すことせず、あくまで一字一客のかたちを示す。

所作をみつめる。流麗さのなかに曲線の優美な円なり、リズムを有する。その運びに、一般の茶室よりもむしろ居合、または剣舞に近い印象を受ける。仙台湾茶道、石州流清水派、四代藩主綱村以降の歴代藩主が愛し、時に伊達家の外交を大いに支えた代表的な大名茶（武家の茶道）は、300年前以上とはほとんど変わらぬ姿で伝えられていた。

政宗の時代、伊達家（藩主の指図）となった一世清水道鑑にはじまり、二世勘次郎を経て三其重平によって確立・発展を遂げた仙台湾茶道石州流清水派。数寄大名として名を馳せた綱村は特に茶道に造詣が深く、道平を茶道頭（指図）した後は生涯にわたって茶の湯に情熱を注いだという。かつては徳川將軍家に準ずるかたちで採った石州流だが、道平と綱村の存在によって仙台湾独自の石州流、後に全国へとその影響を及ぼす「清水

派」が確立したといえよう。その習儀は、やはり所作にある。他の流派ならば草・行・真・または九品札いずれにしても三指をついての庄礼であるが、石州流清水派では膝の横に拳をつく礼が正式となる。茶室に付しては正客ではなく、お手前が正客からもっとも優遇に見えよう。斜体で向き合う。豪胆で無骨、されど武士の立ち居振る舞いに似合った、男仕なる作法だ。そしてもうひとつ、これこそ最大の特徴であるのが、茶を飲む際に茶碗を回さないことだ。一般的には、亭主は茶碗の正面を客に向けて茶を出し、客はその茶碗の

雄々しく、大胆。されど優美。武家の茶道に伝わる粋と敬意

景色を汚さないよう正面を外して飲む。亭主と客の、謙譲のやりとりである。しかし石州流清水派にとって、主客は藩主ただひとり。最高にして唯一の客は、謙譲の必要を持たない。最高の景色と味わい、飲み尽くすだけでいい。藩主への正式な茶のもてなしは、「極真の手数（手前）」として藩主以外には決して供されることはない。奥方同伴の場合の「二連天目台子の手数」も同様である。今や門外不出となった「極真」を神髄に抱えながら、仙台湾茶道石州流清水派は伊達文化のなかでも最も純粋な形で今に生きている。



現在の宗家、十一世大泉道鑑氏。「極真の手数（手前）」と「二連天目台子の手数」を一手で持つ仙台湾茶道石州流清水派の要、伊達政宗公の命日である5月24日には、別荘殿での法要にて献茶が行われる。

〒仙台湾市若林区清水小路1 ☎022-276-0344
www.senda-sekishuryu.com

「清水動閑註解 石州流三寶圖像」および「仙台湾茶道」は石州流清水派宗家にとって三種の神器のひとつ。歴史的資料価値も非常に高い。なお、宗家の母である仙台湾大泉道鑑は、これを現代語訳に翻し直して、「清水動閑註解 石州流三寶圖像付 仙台湾茶道」を出版した。

